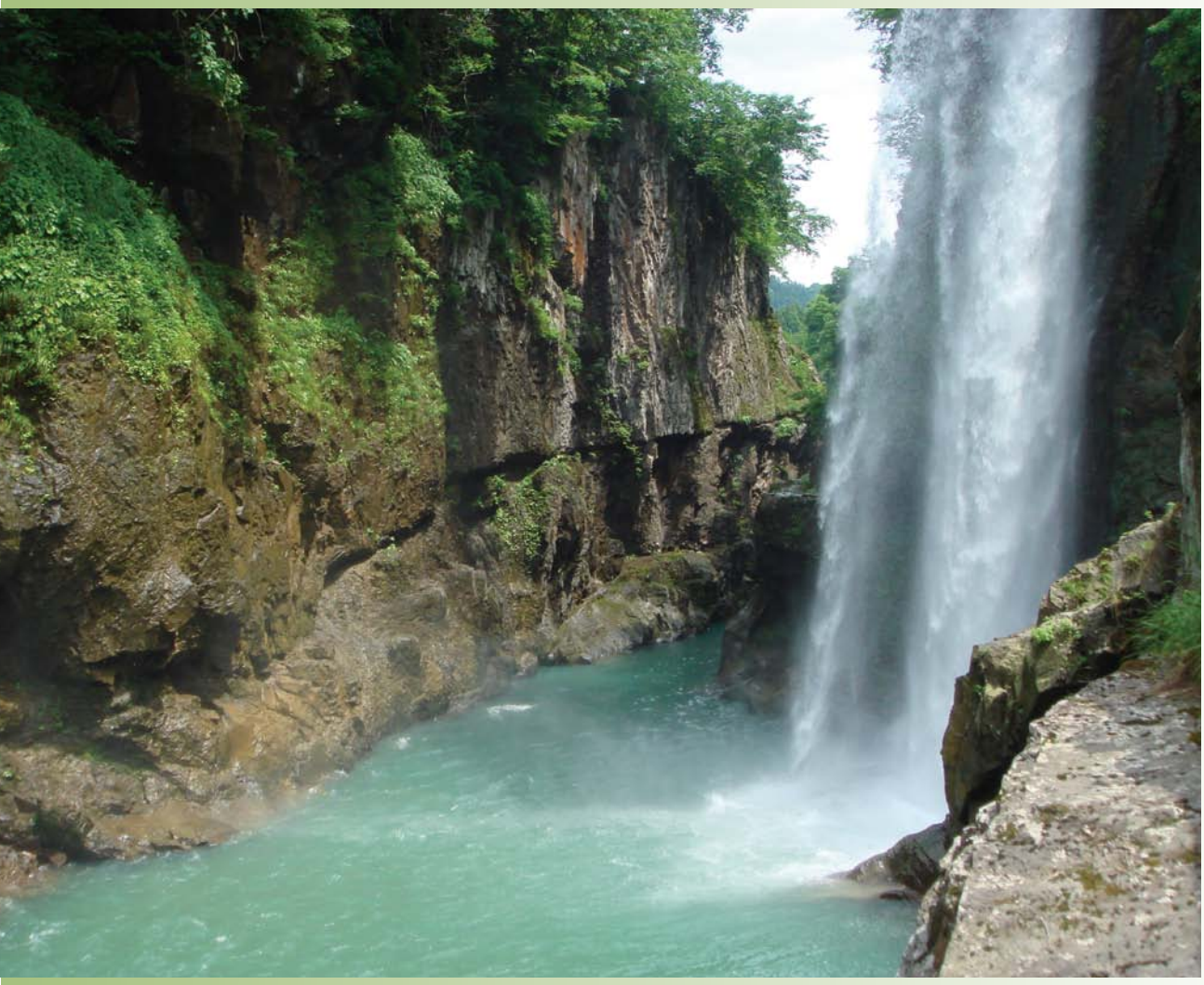
ISSN 0388-4732

石川県白山自然保護センター普及誌

はくさん

第41巻　第4号



目　次

P 1
綿ヶ滝

P 2
加賀菊酒の源流を探る～『加賀國菊酒考』にみる菊酒のいわれ～
栂　典雅

P 8
白山国立公園　市ノ瀬のニセアカシア
野上　達也

P11
石川県のシカ
江崎　功二郎

P14
ブナオ山観察舎だより

P15
いしかわ自然学校「山のまなび舎」（平成26年度開催事業）

P16
フォトギャラリー、センターの動き

綿ヶ滝（わたがたき）

綿ヶ滝は、手取川の中流域、白山市下吉谷町の手取峡谷沿いにあります。落差は32 mあり、水量の多い時期には、滝の水が水面を打った時の風圧が、周辺に多くの水しぶきを舞い上がらせます。綿ヶ滝の名前は、このように流れ落ちる水しぶきが、綿が舞っているように見えたことから名付けられたと言われています。綿ヶ滝を落ちる水は、河岸段丘面の上を流れている駿馬川（しゅんまがわ）です。この駿馬川と手取川本流との流量の差が、落差のある滝を作り出しました。手取川が大地を急激に下方に削り込み手取峡谷を形成している時も、駿馬川はそれほど侵食力が強くなく、手取峡谷がどんどん深くなっていくことで、落差のある見事な綿ヶ滝ができあがったのです。手取峡谷は、橋の上からの眺めもよいですが、峡谷に下りるとよりダイナミックな大地の営みを感じる景色が広がります。峡谷を下から眺められる場所は限られており、その代表的な場所が綿ヶ滝のポイントです。滝の近くまで近寄ることもでき、水しぶきを肌に感じながら、周辺の手取峡谷の深さを体感できます。（日比野 剛・東野外志男）

加賀菊酒の源流を探る
～『加賀國菊酒考』にみる菊酒のいわれ～

梅　典雅（石川県白山自然保護センター）

平成 17 年（2005）、白山市内の酒造メーカー５社が、酒造りの歴史と伝統の技術に誇りを持ち、さらなる発展と未来への伝承を目的として「白山菊酒呼称統制機構」を設立しました。同機構では、「白山菊酒」と名乗るために必要な、原料の水や酒米、造り方など９項目の基準を設けていますが、その認証を受けた酒にのみ使われる水色のロゴマークを目にされた方も多いのではないでしょうか。また、この名称は、国税庁の定める「地理的（原産地）表示」によって保護され、他の地域の酒には使用できないことになっています。

一方、上記の５社が造る「白山菊酒」以外の酒や金沢市内の酒造メーカーの酒には、「加賀菊酒」「加賀の菊酒」と書かれているものもあります。

これら「菊酒」とは、いったいどのような酒なのでしょうか？　ここでは、『加賀國菊酒考』（石川県立図書館所蔵、以下『菊酒考』という。）なる古文書を主体に、菊酒について考えてみたいと思います。

はじめに

『菊酒考』は、加賀藩士で郷土史家の富田景周（とだかげちか）が著したもので、世に出たのは文政６年（1823）とされています（図１）。景周は、酒や菊花酒などに関する和漢の故事を引用・紹介しつつ、加賀菊酒とはなにかを考証しているのですが、その根底には、加賀菊酒の産地として、鶴来と金沢の両説があったからでしょう。それは、村田千里なる加賀藩士・俳人に「手取川水汲みの図」（図２）及び「犀川の図」（図３）と呼ばれる２点の彩色画を描かせ、これらを載せていることからも伺えます。

そこで、まず両説に関係する箇所を参照し、加賀菊酒の由来や背景をみていくことにします。なお、原文を引用した部分・意味は＜　＞でくくり（そのまま引用した文・語句にはアンダーライン）、筆者の注などは（　）で表しました。また、原文のひらがなは現代のものに改めたほか、カタカナのルビは原文のまま、ひらがなは筆者が付したものです。

図１　表紙に小菊模様をあしらった『加賀國菊酒考』
石川県立図書館所蔵（以下 . 図２～５同じ）。

図２　手取川水汲みの図（『加賀國菊酒考』複製本より）

『菊酒考』における産地「鶴来」

「鶴来説」とされる箇所については、＜石川郡の酒の名が菊と呼ばれて久しい＞旨を記した後に、＜そもそも此國の巨鎮たるこしのしらねは皇國（ミクニ）にて三（ミツ）のおほだけ（大岳、原文に駿河の富士山、加賀の白山、越中の立山の注記あり）のひとつ＞として白山を持ち出し、＜その高さは富士山にもひとしく、根元は越加濃三国にまたがる広くて立派な山である＞と称え、＜白山のゆきはきゆる日なく、（中略）秀霊の鍾（アツ）まれる山にて、霊応記に蓬萊（ホウライ）（仙人の住む仙境）と書いてあるのももっともなことだ＞と述べています。

図３　犀川の図（『加賀國菊酒考』複製本より）

これに続いて説かれるのが図４の傍線の部分ですが、なるべく原文に即して現代語にすると、以下のようになるかと思います。

＜この山中の圓（マル）石河（丸石谷）の両岸が岩壁をなす下に、白花の瘦（やせ）菊が群生するところがあり、こ

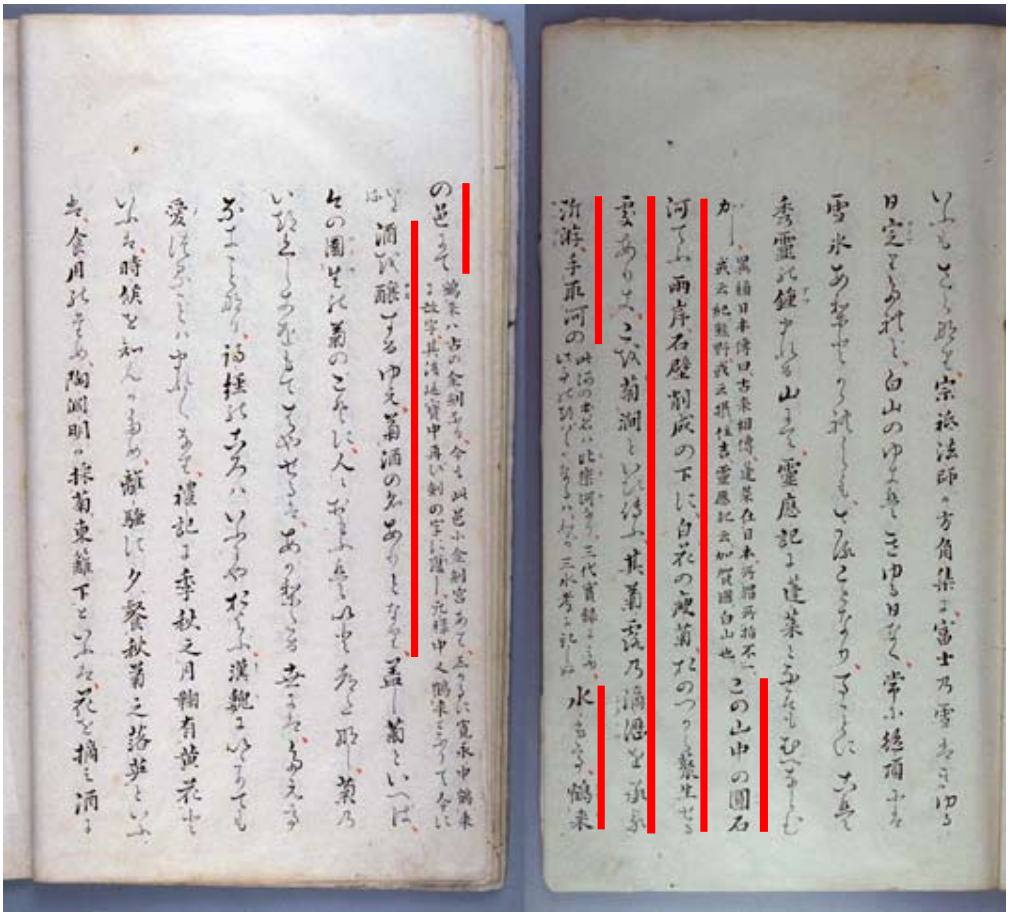


図４　『加賀國菊酒考』の手取川・鶴来に関係する部分

写真１　手取川支流の丸石谷源流部にかかる「百四丈滝」（左）と手前にある「黒滝」（右）。このあたりを「菊澗」と呼んだのであろうか。

れを菊澗（キクガタニ）といい伝う。その菊の露の滴（したた）りを受ける川の下、手取河の水をもって、鶴来（ツルキ）の邑（むら）にて酒を醸（カモ）すことから、菊酒の名がある。＞

また、数ページ後には、鶴来の白山比咩（しらやまひめ）神社に祭られる菊理媛（きくりひめ）（くくりひめ）に言及し、＜この菊理媛は白山の神霊なれば、菊酒の菊は即ち菊理の菊＞であり、＜白山菊澗から流れる川の水で醸す酒なので、古来菊酒の佳名を負うことになった＞とも書いています。なお、＜加賀の阿菊（オキク）という女性がこの酒を造り始めたから＞という言い伝えも紹介していますが、これは俗説だろうとしています。

『菊酒考』における産地「金沢」

「金沢説」に関係する部分については、＜石川郡犀川上流の大障子谷のうえにある菊が嶽（ダケ）にも自生

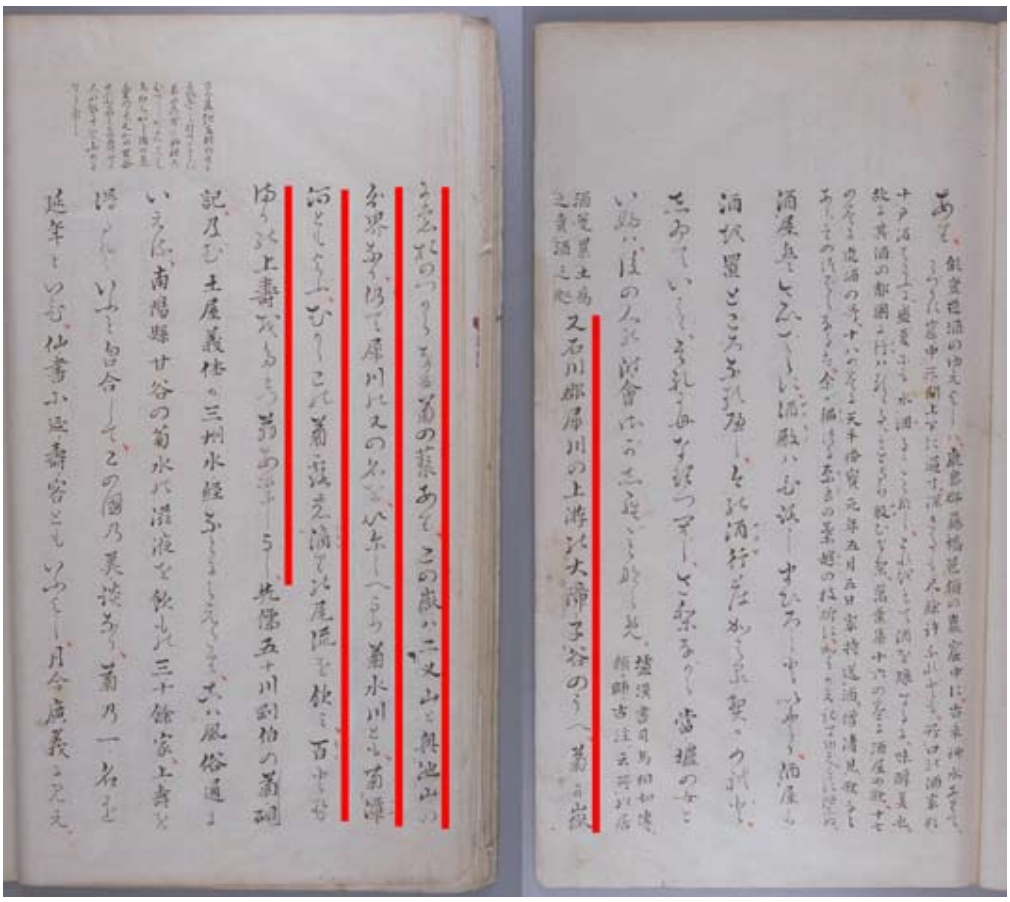


図５『加賀國菊酒考』の犀川・金沢に関係する部分

する菊の草むらがあり、よって犀川の又の名を、いにしえより菊水川とも、菊潭河とも呼ぶ＞と記し、＜昔、この菊の露の滴りが集まった下流の水を飲み、百歳余りまで生きた翁がいたことによる＞と述べています。

そして、幕末から明治期に活躍した森田平次の『金沢古蹟史』には、＜かの紙屋九右衛門の家で醸す酒も、往昔より菊酒と呼びて、犀川の河水を以て造れりといい伝えたり。今犀川附近の酒造家が造る酒銘に、菊一或は萬菊などと名付けられているのも　其の実は菊酒の意にて、犀川の菊水を以て造れるゆえなるべし＞と書かれています。

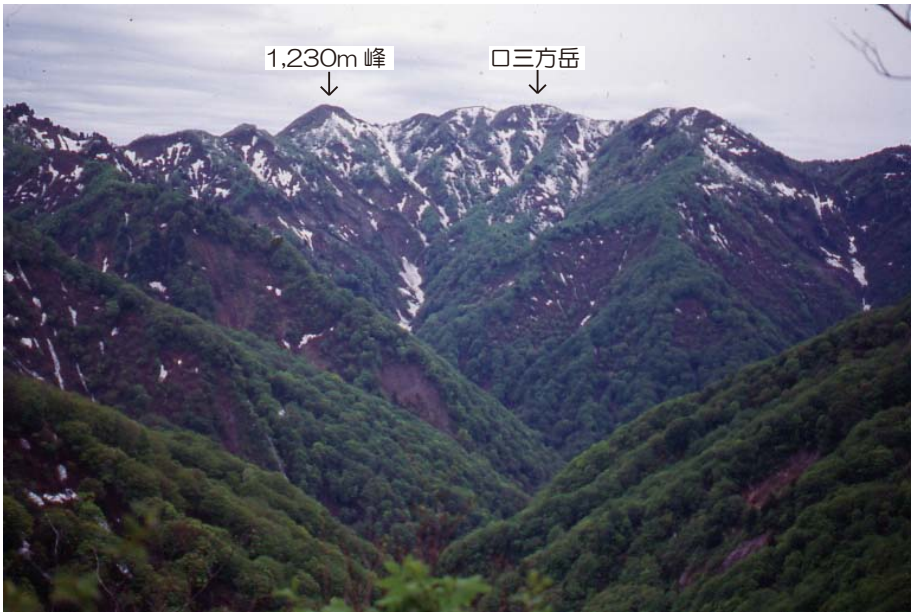


写真２　犀川源流部から望む口三方岳
山頂の左の峰(1,230m)あるいは画面左端の峰が「菊が嶽」であろうと思われる。

なお、「菊が嶽」については、『菊酒考』に、＜この嶽は二叉山と奥池山の分界なり＞と記されており、「大障子谷」は、「大清水谷」と呼ぶ谷だと思われますので、犀川源流の二又川と旧河内村を流れる直海谷川を分ける口三方岳（1,269.4m）と中三方岳（1,306m）の間にあるいずれかの峰であろうと推測されます。

また、犀川沿いには「菊水」にまつわる地名が今もあります。『角川日本地名大辞典　石川県』(1981)には、「菊川」は江戸期からの町名で、＜犀川の雅名を菊水川と呼んだことによる（古蹟史）＞と書かれています。犀川支流の内川上流にある「菊水」は、昭和 29 年からの町名として、＜もとは内川村大字後谷。内川の水源地の当地に 16 弁の菊の群生地があり、一帯を菊水と呼称していたことによる＞とあり、源流部には「菊水滝」と呼ばれる滝もあります。

「鶴来説」VS.「金沢説」

『菊酒考』には、犀川のことを述べた後、中国の「菊水」にまつわる伝説や「菊花酒」（９月９日の重陽の節句に、邪気を払い、長命を願って飲む菊の花びらを浮かべた酒）など、菊と不老長寿の関係にもふれつつ、＜清冽な色、馥郁とした香り、芳醇な味で、盃の底に残った酒が菊模様をなし、他で産する酒とは異なるので、菊酒の名がついた＞と書かれています。

さて、それでは菊酒の原産地として、いったいどちらに軍配が挙がるのでしょうか。以下に原文を掲げてみましょう。

＜菊酒の説、鶴来金沢の酒肆（酒店）にわたり、一定の論なきに肖といへども、これを要するに、菊酒は加賀闔國（国全体）の酒の美称なり＞

読めない古文を懸命にたどってきた者には、まったく拍子抜けするほどサラリと流されてしまいましたが、つまるところ「菊酒」は、加賀の国で造られる美し酒の総称であると言っているのです。

しかし、『菊酒考』の前著である『金城三河考』（犀川の項）には、前述した「金沢説」と同様のいわれを述べた後、＜此に付ても、加賀菊酒の説あれども、考ふるに、鶴来醸酒の説と相混じ誤るに似

たり。以て之を取らず。＞と言い切っているのです。もしかしたら、『菊酒考』を書くにあたって、考えが変わったのか、あるいはあえて明言を避けることにしたのかもしれません。

「菊」について

富田景周の博識ぶりは、これらの著書に遺憾なく発揮されているようですが、ここで両説に登場する「菊」について、若干の考察を試みてみたいと思います。

まず、『菊酒考』には、＜二源の菊花、白山はしろく犀川は黄なり（中略）ともに野菊さまにて、酒に浸（ヒタ）すれば香気あさからず、こは上文にいへる山路の菊の類＞としており、自分の梅園に移植したが、絶えてしまったという意味のことが書かれているので、これらの菊を景周は実際に見ていると言ってよいでしょう。また、『金城三河考』では、丸石谷の菊は、＜其花単弁の白花＞とし、犀川の方は＜其花単弁黄色の一種のみ＞と記しています。

それでは、これらの菊は、石川県内に生育するキクのどれにあたるのでしょうか。

私は、丸石谷の白花の菊は、岩場に生えるイワギクではないかと考えています。頭花の径は４センチメートルくらいあって見栄えがしますが、やや長い茎で岩場に立つ姿は、『菊酒考』にいう「痩菊」と言えなくもありません。イワギクは、日本でもごく限られた地域にしか分布しておらず、石川県では蛇谷一帯に生育することが知られています。今では白山スーパー林道を走れば見られますが、昔は、深山幽谷に生える珍しい菊として、山びとが川下の民に伝えたのではないでしょうか。ただ、蛇谷と丸石谷は、比較的近いとはいえ、私の知る限り、丸石谷にイワギクがあるという話は聞いたことがありませんので、これは今後の課題です。

なお、蛇谷の北にある雄谷で、わずか１個体ですがイワギクの花を見たことがあります。さらに、この雄谷の源流のひとつ水晶谷には、「菊仙女（きくせんにょ）」の伝説があるのです。菊を食べて、いつまでも若く美しい女性が、世話になった村人へのお礼として岩の上に菊を植え、病人が出たら食べさせなさいと言って旅に出ます。言われたとおりにすると、たちどころに病が治るので、村人はその岩の上に祠（ほこら）を建てて祭ったということです。話がそれましたが、ここにも「菊」が登場するのは興味深く、その菊はイワギクであろうと勝手に想像しています。

もうひとつの可能性として、リュウノウギクがあります。名の「竜脳」は、熱帯産の「竜脳樹」か

写真３　蛇谷一帯の岩場に生育するイワギク

写真４　菊仙女の伝説が残る水晶谷源流部

写真５　香りが特徴的なリュウノウギク

ら取る香料に香りが似ているからとされ、前述した「香気あさからず」に符合します。また、本種は山地に比較的広く分布し、丸石谷でも生育を確認していますが、径２，３センチメートルの頭花が群れ咲くさまに、「痩菊」という表現が当てはまるのかという疑問があります。

一方、犀川「菊が嶽」の黄色で一重の菊については、サワオグルマ、キオン、ミヤマイワニガナなどが頭に浮かびますが、なんともいえません。機会があれば、調べてみたいものです。

おわりに

実は、「鶴来説」の有力な根拠とされているものに、大永７年（1528）に白山本宮の長吏、阿仏坊が京の公卿たちに菊酒をふるまったという『言継（ときつぎ）卿記』の記述があります。そのころの鶴来は、白山本宮の所在地としてにぎわっていたと思われますが、前田利家が金沢城に入るのは天正 13 年（1585）であり、一向宗徒の「尾山御坊」建立にまで遡るとしても天文 15 年（1546）のことですから、それ以前の金沢で都に持参するほどの酒が造られていたとは考えにくいというのが、その論拠のようです。

それはそうとして、たとえば金沢の発展に伴い、犀川の水を使った良質の酒が金沢でも造られるようになるといった、時代の変遷と共に、菊酒やその由来にも「揺れ動き」があったというのが自然な見方なのではないでしょうか。

なお、太閤秀吉が催したという盛大な「醍醐（だいご）の花見」にも「加賀の菊酒」が登場します。諸国から集められた名酒の一番目に掲げられている（『太閤記』）という話は、よく見聞きするところですが、それは、慶長３年（1598）のことであり、利家が金沢城に入ってから十数年は経っているので、そのときの菊酒がどちらの産であったのかは、よくわかりません。

いずれにしても、酒造りには、よい水、つまり適度にミネラルを含み、清澄で冷たい水が欠かせません。現代の酒造には、地下水が使われていますが、当時は、「水汲みの図」にもあるように河川水を使っていたわけですから、その川の水源や流域の環境が酒の質に直に影響することは明らかです。また、もうひとつの原料である米の栽培にも、よい水が必要です。

ここで、鶴来・金沢のどちらの説も菊からしたたる露を菊酒の源としていることに思いあたります。そのこと自体は、菊水伝説にも重なり、科学的でないことは言うまでもありませんが、私には「菊」は不老長寿・仙境の象徴だけでなく、良質の水もしくはそれを生む自然を暗示しているものではないかと思えてなりません。

手取川にせよ、犀川にせよ、その源流をなす豊かな森や多量の雪を戴（いただ）く山々が名酒を育んできたと言えるでしょう。そして、それは私たちがこれからも大切にしていかなければならないものではないでしょうか。

本稿をまとめるにあたって、室山孝氏（小松市史編纂委員）にご教示を賜りました。ここに厚くお礼を申し上げます。

白山国立公園　市ノ瀬のニセアカシア

野上　達也（白山自然保護センター）

はじめに

６月上旬、市ノ瀬ではニセアカシアの甘いにおいが薫ります。その白い花はとても目立ち、遠くからでもニセアカシアが咲いていることが分かります。ニセアカシアは、北米原産のマメ科ハリエンジュ属の落葉高木で、和名ではハリエンジュ（針槐）とも呼ばれています。もともと日本には生育していなかった外来植物で、日本には明治６年（1873）に渡来したといわれますが、現在では、北海道から沖縄まで広く分布しています。その用途は広く、街路樹、公園樹、砂防・土止めに植栽されるほか、材は器具用等に用いられています。また、蜜源植物としても有用なほか、かつては炭焼きにも用いられていました。

写真１　市ノ瀬ビジターセンターとニセアカシアの花

ニセアカシアは種子で増えるだけでなく、伐採しても切ったところから芽を出すほか、地上部を取り除いても地中に残った根からも芽が出ます。この旺盛な繁殖力により河川敷などに急速に分布を広げることから、在来の生態系に対する影響が懸念されています。そのためニセアカシアは、日本生態学会がリストアップした「日本の侵略的外来種ワースト 100」に選定されているほか、外来生物法（特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律）による特定外来生物ではないのですが、被害があることが明らかになっているため、引き続き特定外来生物等への指定の適否について検討する要注意外来生物として、環境省が選定しています。

白山国立公園内にいつ頃、また、何のためにニセアカシアが持ち込まれたのかは明らかではないのですが、砂防工事の際の緑化のため持ち込まれたと考えられています。ただし、市ノ瀬のニセアカシアには、緑化以外での利用がありました。白山麓ではハチミツの蜜源としてトチノキの蜜が採取されていますが、市ノ瀬ではかつて各家でミツバチを飼い、ニセアカシアを蜜源としてハチミツを採取していたそうです。また、材が硬く、良い炭になるとのことで炭焼きにも用いられていました（現在は養蜂も炭焼きも行なわれていません）。

写真２　ニセアカシアの花

ニセアカシアの花は白く、たくさん咲くことから遠くからでもよく目立つ。またその蜜はハチミツとなる。

市ノ瀬地区は現在、再整備の計画が持ち上がっており、環境省が中心となり関係各機関、住民の代表らが集まり検討会を行い、整備計画をまとめていますが、市ノ瀬地区を白山の入口としてふさわしい景観にするため、外来種であるニセアカシアをどうするかについても議論しています。

今回、市ノ瀬地区のニセアカシアの分布状況について調査したので、その結果をご紹介します。

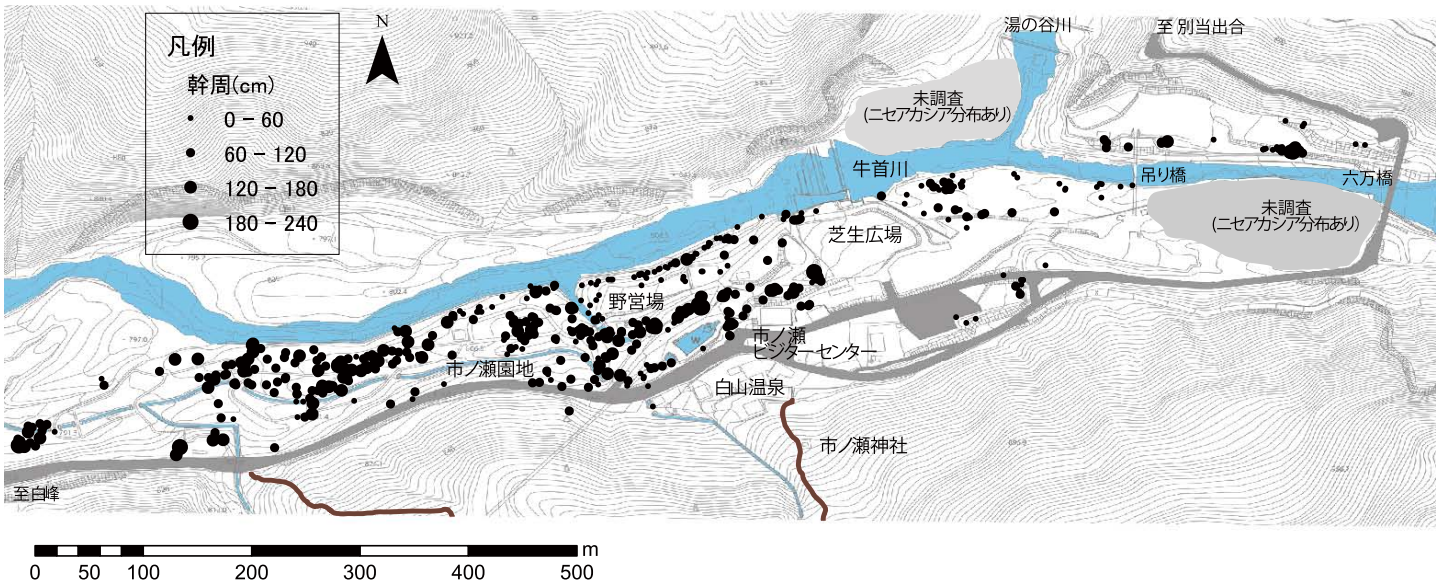


図１　市ノ瀬におけるニセアカシアの分布状況

分布調査

市ノ瀬地区の道路沿い、駐車場、野営場及び市ノ瀬園地内でニセアカシアを探しながら歩き回り、胸高（地上約 1.2 m）での直径が 1 cm を超えるニセアカシアを確認した位置を GPS を使って記録していきました。また、胸高での幹周りの長さをメジャーを用い、計測しました。最初はすぐ終わるだろうと思えた調査でしたが、よく見るとあちこちに、そして観察路からだいぶ離れた園地の奥の方にまでニセアカシアが見つかります。ニセアカシアはハリエンジュともよばれるようにするどい棘をもっていますが、やぶの中の調査では、この針に刺されながらの調査で、痛い思いをしながら、結局丸々２日間かけての調査となりました。

さて、その調査結果ですが、図１のとおりで、全部で 540 本ものニセアカシアが確認されました。人手が入った道路脇や駐車場わき、市ノ瀬野営場内だけでなく、比較的樹木が多い市ノ瀬園地内にもたくさんのニセアカシアが確認され、特に市ノ瀬園地内のニセアカシアは大径木のものが多く見られました。また、河川(牛首川）区域内の堰堤の上にも、大径木のものは少ないのですが、堰堤に沿うように数多く分布していました。また、詳しい調査は実施していないので詳細は分かりませんが、調査していない民有地の部分や市ノ瀬園地の対岸でもニセアカシアの分布が確認されました。

幹周を見てみると、幹周 180cm（直径で約 60cm）を超えるような大径木も確認されました（図２）。また、540 本中、117 本(21.7%)にはイワガラミやアケビ、ツタウルシ、ツルマサキなどのツル性植物が着生しており、中には複数種が着生している個体もありました。

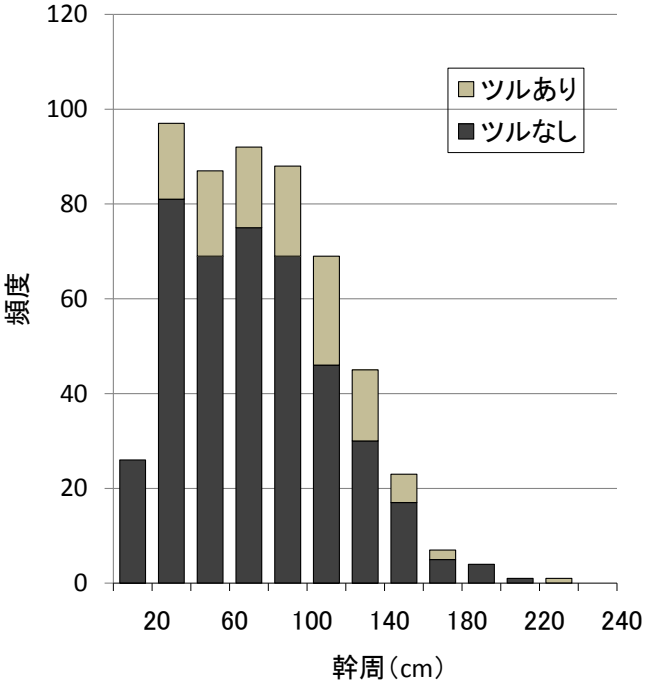


図２　幹周の頻度分布

ニセアカシアの除去

石川県では内灘海岸で防風林として昭和33年（1958）からニセアカシアが植栽されてきましたが、平成3年（1991）以降ニセアカシア林に衰退が見られるようになり、多くのニセアカシアが枯れ、その枯れた様子は、景観上の問題となりました（写真3）。今回の調査の結果、500本を超えるニセアカシアが確認され、道路脇や駐車場内、市ノ瀬野営場内のみならず市ノ瀬園地内にも分布が確認されたことから、その完全な除去は容易ではないと思われます。ニセアカシアの除去作業は日本各地で行われていますが、伐採だけでは効果が薄いことから重機などを用いて根ごと掘り起こす作業が行なわれています。市ノ瀬地区で、特に園地内ではニセアカシア以外にもオオバヤナギやドロノキ、ウリハダカエデなどのカエデ類など多くの植物が生育しているほか、多くの岩塊があるため、重機を用いた除去は困難でしょう。オオバヤナギやドロノキは石川県内では分布が限られ、また、オオバヤナギは改訂・石川県の絶滅のおそれのある野生生物 いしかわレッドデータブック＜植物編＞2010では準絶滅危惧種として指定されており、その保護はとても重要です。一方、ニセアカシアの除草剤による除去方法としては、グリホサート剤を茎や葉に散布することが薬剤の効果や周辺環境への影響などから効果が高く安全であるとされています。しかしながら、市ノ瀬地区は白山国立公園内であり、除草剤の活用には環境省をはじめ関係各機関の合意のほか一般のコンセンサスも得ることが必要でしょう。そのほかのニセアカシアの除去方法としては、長野県茅野市において、生立木の樹幹を全周剥皮して樹木を枯殺する「巻き枯らし」手法が用いられています（写真4）。そこでの「巻き枯らし」は、全てのニセアカシアにいっせいに用いるのではなく、1割程度に用い、徐々に時間をかけ在来の樹種へ変えていくこととしています。この方法ならば、すでに生育しているニセアカシア以外の植物にも除去の影響は少ないと思われます。参考までに長野県の事例について、その後の状況について尋ねたところ、ニセアカシアの個体数は減少したものの根絶までには至らなかったのことでした。今後、市ノ瀬におけるニセアカシアをどう管理していくのか、国、県、市を含めた多くの関係する機関が連携しながら検討し、長期的に実施していくことが必要となります。

写真３　内灘海岸近くの枯れたニセアカシア
何本ものニセアカシアが一斉に枯れてしまっている。
（石川県農林総合研究センター林業試験場　八神徳彦氏提供）

写真４　ニセアカシアの「巻き枯らし」
長野県茅野市で実施されたニセアカシアの「巻き枯らし」。立木の幹の皮と形成層と呼ばれる部分を一周全部はぎとってしまうことで、樹木を枯殺する。
（長野県林務部信州の木振興課　小山泰弘氏提供）

石川県のシカ

江崎　功二郎（白山自然保護センター）

シカとは

分布：北海道、本州、四国、九州

食べ物：植食性

成獣の体重：オス60～140kg、メス55～80kg

群れサイズ：一夫多妻

メスの繁殖：1才から毎年出産

子の数：1頭

最高齢：24才

写真１　日本のシカ（ニホンジカ）の分布、食べ物、大きさ

写真２　津幡町にある石川県森林公園森林動物園シカふれあい広場石川県内では唯一、シカを身近に観察できる施設。シカせんべいも販売されている。

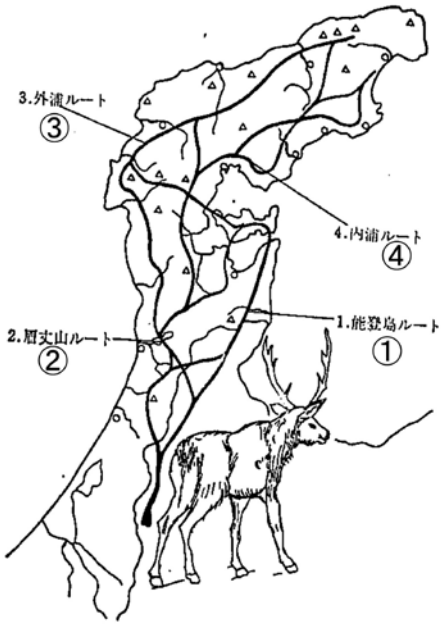


図１　近世の能登へのシカのワタリ（鹿島町史より抜粋）

①能登島ルート、②眉丈山ルート、③外浦ルート、④内浦ルートが図示されている。

ニホンジカ（以下、シカ）は北海道から九州まで分布しており、エゾジカ、ホンシュウジカ、ツシマジカなどの亜種に分けられています（写真１）。奈良公園ではシカを身近に見ることができ、「奈良のシカ」として天然記念物に指定されています。奈良のシカは野生動物と人との共生関係が築き上げられている例として世界的にも注目されています。オスジカの立派な角は毎年冬から春にかけて生え換わり、秋の繁殖期にはハーレムを作ります。メスは１才から出産可能で、毎年出産するため、急激に生息数を増加させることが可能です。

かつては石川県の数か所で飼育されていましたが、現在では津幡町にある石川県森林公園のみになっています（写真２）。ここの個体は大分県の別府動物公園や宮城県の金華山島から譲り受けた個体を繁殖させたようです。

石川県のシカ史

石川県においてシカは古くから分布し、小松市大谷山貝塚（縄文時代）、七尾市鵜浦馬隠し遺跡（縄文～中世時代）および珠洲市永禅寺１号古墳（古墳時代）から骨や角の加工品が出土しています。

能登半島には鹿島のように「鹿」が付く地名が多く、近世にはシカが高密度に分布し、加賀地方の低地から能登地方へかけてシカの移動ルート（図１）や多くの被害があったことが鹿島町史などに記録されています。「のと・かが四季の野生（北国新聞社）」によると、明治時代の能登島では、秋に十数頭のシカが一列になって海を渡ってきて、島中の小豆や大豆などを片っ端から食いあさったため、島民によって海に追い込まれたり落とし穴に落とされたりして捕獲されました。しかし、こうした方法だけでは手に負えず、明治

39 年（1906）10 月のはじめに能登島において第九師団歩兵七連隊にシカの駆除を依頼し、演習の名のもとに半日がかりで 200 頭以上射殺し、七尾港の波止場に土塁のように死がいが積み上げられたことが記述されています。このような大量駆除の実施、急激な開発や気候の変化の影響により、石川県のシカは大正までにはほぼ絶滅に至ったようです。

しかし、平成になり全国的にシカの分布、シカによる農作物や生態系被害が拡大する中で、県内の目撃情報や捕獲個体が徐々に増加し、シカによる林業被害も確認され、加賀地方を中心として分布密度が徐々に増大していることが第 1 期石川県ニホンジカ保護管理計画に示されました。

シカのフンや角とぎ

県内ではなかなか遭遇することがないシカですが、シカが生息する森ではフン、木の皮のかじり痕や角とぎ痕を発見することができます（写真３）。フンは、大きさや形だけではカモシカのフンとよく似ていてほとんど区別がつきませんが、歩きながらフンをバラバラとするので、カモシカのように数 100 粒もまとまっていることはありません。シカは冬場に木の樹皮をかじって餌不足をしのぎます。リョウブが大好きで、リョウブの幹をよく観察すると写真３の中のようなシカに食べられたあとが見つかります。また、秋の発情期にはオスが袋角をとるために角を木の幹に擦りつけるために引っ掻いたような角とぎ痕が付きます。

写真３　森林で観察できるシカの痕跡
左：フン、中：かじり痕、右：角とぎ痕

シカの交通事故

シカが増えるとシカと車との衝突事故が増えるようです。写真 4 の左は北陸自動車道の金沢市不動寺にかなり以前から設置されている野生動物飛び出し注意の看板です。石川県でシカがほとんどみられないときからこの看板があって違和感がありましたが、今ではシカが増えてシカのモチーフが現実味を帯びてきました。写真 4 の右は平成 24 年に白山市吉野の国道で死亡していた大型のオスジカです。口元から血のような体液が流れていますが、他には外傷はなく非常にきれいな個体でした。全国ではシカとの接触事故が非常に増えており、重大事故につながるおそれもありますので、県内でも注意が必要です。

写真４　シカをモチーフとした看板（左、北陸自動車道金沢市不動寺）と車と衝突したオスジカ（右、白山市吉野、平成 24 年）

白山国立公園のシカ

標高の高い白山国立公園でもシカが時々見られるようになっています。六万山、南竜ヶ馬場やブナオ山でシカが撮影されました。写真５は石川県白山自然保護センターブナオ山観察舎から撮影された蛇谷を渡るシカです。ブナオ山観察舎は野生動物を観察する施設なので、色々な野生動物が見られるようになると楽しみが増えますが、シカは貴重な高山植物などを食い荒らしてダメにしてしまうので、多くの人が分布を拡大するシカに困っています。

シカの角

シカの角は毎年生え換わり、その分岐数で年齢を数えることも可能です。４才以上のオスジカでは３つも分岐し立派な角を生やします。角は冬に落とすので、シカの越冬場所を探し当てると、立派な角を拾うことができるかもしれません。写真６はブナオ山観察舎に展示してある交通事故で死亡したシカの角です。

写真５　蛇谷を渡るオスジカ
（白山市尾添、平成 25 年）

写真６　シカの角
（白山市尾添ブナオ山観察舎１Ｆ）

シカ問題と対策

石川県の加賀地方に隣接する福井県では 30 年前までは嶺南地域を中心にシカがわずかに生息していましたが、その後分布が拡大し、生息密度の増加とともにシカによる農作物被害も多発していきました（第３期福井県特定鳥獣保護管理計画（ニホンジカ））。特に生育期の大麦やソバ、ウメの新芽や枝葉、田植え後の水稲の苗や稲穂などの被害が目立っているようです。被害の防止対策には電気柵を金網柵などの防護柵が整備されています。小浜市では高さ 1.5 mの金網柵に４段の電気柵が付け加えて設置されています。また、スギなどの幼齢木の枝葉食害や剥皮被害などの林業被害も発生しており、平成 14 年にはその被害面積は 500ha に達したようです。

石川県ではシカの角とぎによるスギやヒノキの被害が平成 21 年ごろから発生しています（写真 7）。今のところ被害は大きくはありませんが、シカの生息密度が増加すれば福井県と同様な甚大な被害に発展する可能性があります。

石川県ではこのような農林業や生態系被害の拡大を未然に防止し、豊かな生物多様性を保全するため、第１期石川県ニホンジカ保護管理計画を策定しました。ここには狩猟による捕獲制限の解除や個体数調整捕獲の実施など、今以上に個体数を増加させない計画が盛り込まれています。

写真７　シカの角研ぎ
（加賀市九谷ヒノキ林、平成 25 年）

ブナオ山観察舎だより

ブナオ山観察舎のキャラクター・かもちゃん

白山まるごと体験教室「雪の森へ行こう」

白山自然保護センターの白山まるごと体験教室「雪の森へ行こう」は２月 16 日、白山市一里野のブナオ山観察舎で行われ、家族連れら 30 名が冬の自然を満喫しました。

ふかふかの新雪に青空が広がる好条件に恵まれ、参加者はかんじきを履いて観察舎から往復約 2㎞の雪の森を歩きました。自然保護センターの職員や白山自然ガイドボランティアの案内でリスやノウサギの足跡、冬芽、クマ棚などを観察、昼食場所のハンノキの広場ではニホンカモシカを見つけたり、斜面での尻滑りを楽しんだりしました。県内のほか、京都から訪れた参加者もいて、初体験のかんじき歩きに感激の様子でした。

かんじき快適！　かんじき初体験の参加者も雪の森を快適に歩きました

ブナオ山の見えるハンノキの広場で昼食

大自然の滑り台
雪の斜面の尻滑りに大人も歓声

何か見つけた！　雪の森は発見がいっぱい

カモシカ発見！　チビっ子も熱心に観察

平成 26 年度開催事業

いしかわ自然学校「山のまなび舎」

石川県白山自然保護センター

■白山まるごと体験教室　「白山を心と体で体験しよう」要申込（約１か月前から電話で受付、先着順）

	日　時	タイトル	内　容	場　所　（集　合）	定員
①	4 月 29 日（祝） 9:00-12:00/ 13:00-16:00	早春の花 カタクリ大群落に出会う	早春の蛇谷自然観察路を散策しながら、一面に咲くカタクリなど春植物を観察します。	白山市中宮 （中宮展示館）	各 25 人
②	5 月 25 日（日） 9:00-15:00	新緑のブナ林と 白山大パノラマを楽しむ	市ノ瀬から岩屋俣谷園地パノラマ展望台へのブナ林内の道をハイキング。動植物の解説もあります。	白山市白峰　岩屋俣谷園地 （市ノ瀬ビジターセンター）	30 人
③	8 月 9 日（土） 18:00-21:00	夜の森を歩こう	夜の森の中を歩いたり、灯りに集まる虫たちを見つけたりする、夏の夜のお楽しみ企画です。	白山市中宮 （中宮展示館）	20 人
④	9 月 28 日（日） 9:00-15:00	トチノキ観察とトチモチ作り	トチノキの観察と実をトチモチとして食べるまでの苦労を少しだけ体験します。	白山市白峰　チブリ尾根 （市ノ瀬ビジターセンター）	30 人
⑤	2 月 15 日（日） 10:00-15:00	雪の森へ行こう	「かんじき」をはいて、冬の動植物を観察し、みんなで雪国の森を探検します。	白山市尾添 （ブナオ山観察舎）	30 人

※①③中宮温泉旅館協同組合と共催、④ネイチャープロジェクト白山と共催。全て白山自然ガイドボランティア友の会が協力。
※参加費④1 人 500 円、④以外 1 人 100 円（それぞれ保険料、資料代、材料費）。

■白山麓里山・奥山ワーキング　「白山をみんなで守ろう」

要申込（②③④ 5 月 8 日から電話、FAX、E-mail で、①約 1 か月前から電話で受付、先着順）

	日　時	タイトル	内　容	場　所　（集　合）	定員
①	6 月 8 日（日） 9:00-15:00	サクッとイノシシ防止隊	イノシシやサルから農作物を守る柵を設置し、野生動物と人の生活との関わりを考えます。	白山市河原山 （河原山集会所）	20 人
②	6 月 22 日（日） 13:00-16:00	白山まもり隊 ー採って楽しむオオバコ茶	市ノ瀬の駐車場のオオバコの除去作業。採ったオオバコをお茶にして楽しみます。	白山市白峰　市ノ瀬 （市ノ瀬ビジターセンター）	100 人
③	9 月　6 日（土） ～ 7 日（日）	白山まもり隊 ー白山外来植物除去作業 in 室堂ー	白山に侵入してきたオオバコやスズメノカタビラなど外来植物の除去作業を行います。	白山　室堂 （白山室堂）	50 人
④	9 月 20 日（土） ～ 21 日（日）	白山まもり隊 ー白山外来植物除去作業 in 南竜が馬場ー		白山　南竜ヶ馬場 （南竜ビジターセンター）	50 人

※②③④環白山保護利用管理協会と共催、①白山市と共催、白山自然ガイドボランティア友の会が協力。
※③④参加費 1 人 4,000 円（食費のみ）、①②参加費無料。

■おいでよ！中宮展示館秋まつり

２日間にわたって開催。申込不要・参加費無料。

	日　時	タイトル	内　容	場所（会場）
①	10 月 4 日（土）～5 日（日） 9:00-16:00	おいでよ！中宮展示館 秋まつり	自然の素材を使った工作、ゲームコーナーなど、中宮の秋を感じる企画が盛りだくさんです。蛇谷観察路での自然観察会も行います。	白山市中宮 （中宮展示館）

※中宮展示館秋まつり実行委員会と共催。

■県民白山講座　「白山を知ろう」　参加費無料。①は 5 月 19 日から電話で受付。②③は申込不要。

	日　時	タイトル　（会　場）	内　容	定員
①	6 月 19 日（木） 13:30-15:30	白山の魅力　-白山の動植物- （石川県立生涯学習センター能登分室）	石川県民大学校能登校で実施の石川県の歴史･文化･自然･産業について学ぶ｢いしかわを知る講座｣の講座の１つとして開催します。	40 人
②	6 月 21 日（土） 13:30-16:00	白山登山と高山植物の集い （白山市鶴来総合文化会館クレイン研修室）	白山の夏山シーズンを前に白山登山の心得や白山の自然について紹介します。また、白山登山や自然に関する最新の資料を配布するほか、登山相談を受付けます。	150 人
③	7 月 19 日（土） 13:30-16:00	白山の自然・文化を知る （白山市民交流センターAV 講義室）	白山の動物や高山植物について、永年調査を続けてきた専門家から、最新の研究成果を交えた話を聞き、白山の自然について理解を深めます。	80 人

※①石川県立生涯学習センター能登分室と共催　②石川県自然解説員研究会、白山市と共催　③白山市と共催

■ガイドウォーク・ミニ観察会　「遊び心で歩こう」　申込不要、無料

中宮展示館・市ノ瀬ビジターセンターでのガイドウォーク

・白山自然ガイドボランティアや職員が中宮や市ノ瀬の自然を案内します。
・日　時： 5 月～11 月（開館期間中）の土・日・祝日の 10:00-12:00、13:00-15:00 の間で 1-2 時間程度

ブナオ山観察舎かんじきハイク

・かんじきを履いて雪山を歩き、冬の自然を観察します。
・日　時：11 月～4 月（開館期間中・積雪時）の土・日・祝日の 10:00-15:00 の間で 1-2 時間程度

申し込み・問い合わせ　石川県白山自然保護センター　　〒920-2326 石川県白山市木滑ヌ４
TEL 076-255-5321 FAX 076-255-5323　URL http://www.pref.ishikawa.lg.jp/hakusan/index.html

フォトギャラリー　ー自然のひとこまー

オニグルミの実をかじるリス　　2014.2.9

ニホンカモシカの家族。交尾行動も見られました。
2014.1.12

常緑のツルマサキの葉を食べるニホンザル
2014.2.2

イヌワシの幼鳥。両翼と尾に白色模様がくっきり。
2014.2.11

センターの動き（平成25年12月28日～平成26年3月28日）

1.9　モニタリングサイト1000（高山帯調査）検討会（東京都）
1.29　白山国立公園コマクサ対策事業検討会（金沢市）
2.6　白山ユネスコエコパーク第1回WG会議（白川村）
2.7　白山国立公園生態系維持回復事業第1回専門委員会（金沢市）
2.16　白山まるごと体験教室「雪の森へ行こう」（ブナオ山観察舎）
2.21　いしかわ自然学校運営協議会（金沢市）
2.21　特定鳥獣保護管理計画（ツキノワグマ）検討会（県庁）
2.26　石川県指定希少野生動植物種オキナグサの保護に係る検討会（本庁舎）
2.28　白山ユネスコエコパーク第2回WG会議（勝山市）
3.4　白山国立公園生態系維持回復事業第2回専門委員会（金沢市）
3.14　白山国立公園市ノ瀬集団施設地区再整備基本計画検討会（白山国立公園センター）
3.24　白山自動車利用適正化連絡協議会幹事会（本庁舎）
3.26　白山ユネスコエコパーク第3回WG会議（郡上市）

たより

本年度のいしかわ自然学校「山のまなび舎（や）」の開催事業は、2月16日の「雪の森へ行こう」をもちまして終了しました。来年度（平成26年度）のいしかわ自然学校「山のまなび舎」は、15頁に紹介した通り、計13の行事を開催する予定です。多くの方々の参加をお待ちします。

白山ユネスコエコパーク協議会が、登録地域である6市1村及び4県と関係機関・団体によって1月27日に設立されました。前々号の本欄で紹介したように、今後も白山ユネスコエコパークの登録を継続するには、これまで設定されている核心地域と緩衝地域に加えて、移行地域（居住区、地域社会や経済発展が図られる地域）の設定が必要となります。そのため協議会では、移行地域の範囲や今後の運営方法などを検討し、登録の継続に向けて取り組むことになりました。　（東野）

はくさん　第41巻　第4号（通巻170号）

発行日　2014年3月28日（年4回発行）
印刷所　前田印刷株式会社

編集・発行
石川県白山自然保護センター
〒920-2326　石川県白山市木滑ヌ4
TEL.076-255-5321　FAX.076-255-5323
URL http://www.pref.ishikawa.lg.jp/hakusan/
E-mail hakusan@pref.ishikawa.lg.jp